

宗教と科学をめぐる研究動向

三田プロジェクトとGPSSプロジェクト

寺尾寿芳
TERAO Kazuyoshi

はじめに

南山宗教文化研究所では、2006年4月より三田一郎客員研究所員（神奈川大学教授、名古屋大学名誉教授）による基金寄託と運営指導のもと、三田基金「科学と宗教」プロジェクトを推進してきた（なお「三田基金」は公式名称ではないが、三田客員研究所員が自らの獲得外部資金を南山大学に寄託した私的基金であるため、便宜上本稿ではこの名称を採用する）。同プロジェクトは基本的に宗教と科学の調和と協働を模索してきたものであるが、その活動はかならずしも純粋学術的な研究に限定することはなく、むしろ宗教と科学の接点をやさしく描写し、大学生を中核とする青年層の啓蒙をつねに視野に収めるものである。このような趣旨に基づく本プロジェクトは、独自の研究活動および研究支援活動に加え、John Templeton 財団の Global Perspectives on Science & Spirituality プロジェクト（以下「GPSS プロジェクト」と略す）のアジア地区における拠点として南山宗教文化研究所が選定された結果、2004年秋に研究所内に設置された「科学・ころろ・宗教」プロジェクトと緊密な協働関係を構築している。

筆者は三田基金「科学と宗教」プロジェクトにおいて研究助手を2006年6月より務めており、本レポートはその間の成果の概要を、主に上記GPSSプロジェクトとの関連をもつものを中心に報告するものである。

プロジェクト誕生の経緯

三田基金「科学と宗教」プロジェクト（以下「三田プロジェクト」と略す）は、2005年度まで名古屋大学で素粒子物理学を研究していた三田一郎氏が、神奈川大学への転任とカトリック名古屋教区助祭職への叙階

を受けて、それまでの名古屋大学から南山宗教文化研究所に「科学と宗教」との関連にかかわる研究の拠点を移したことに始まる。三田一郎基金は本来ある篤志家の寄付に発し、その活動内容は、南山大学に隣接するロゴスセンター（南山大学の運営母体であるカトリック修道会・神言会が設立した青年向け宗教啓発施設）における青年向けキリスト教宣教活動と、南山宗教文化研究所での研究活動に大別され、三田プロジェクトは後者の具体的活動である。2005年度から三年間の本格稼働を経て、現在は一年間の整理期間に入っている。

匿名の原資金提供者と基金運営者である三田客員研究所員はともに、科学者であり、また敬虔なキリスト者である。二人は科学と宗教の極端な乖離に発する諸難問に心を痛め、またそのような状況下で人格形成を迎える青少年の未来に関して多大な不安を抱えていた。国立大学であるゆえに活動上制限を免れなかった名古屋大学を三田氏が退職するに当たり、研究と宣教をともに重視する南山大学の存在が大きく浮上し、また三田氏が南山宗教文化研究所におけるGPSSプロジェクトのシンポジウムでもあった第13回南山シンポジウム「科学から見る『こころ』の意義」のパネリストに選ばれたことや、客員研究所員に就任したことなどを通じて、研究所との絆が急速に強まった。その結果、名古屋大学から南山大学へと三田基金の活動拠点が移行した。三田客員研究所員も参加した同シンポジウムは、すでにポール・スワンソン監修『科学・こころ・宗教』（南山宗教文化研究所、2007年、284p.）に結実している。

三田プロジェクト独自の活動

基本的に南山宗教文化研究所に所属する

研究者および大学院生を中心とする若手研究者の研究支援を中核的活動とする。

学部生を主対象として、6期にわたる「アルファコース」を通じての数百人程度の学生に科学と調和を念頭にキリスト教を宣教し、また三回にわたりヨーロッパ巡礼旅行を実施し、約90名の参加者を得た。「科学と宗教」に関しては、主にアメリカ宗教学会（2006年度はワシントンD.C.、2007年度はサンディエゴ）、国際シンポジウム「宗教多元主義と対話の課題」（2007年度、チュニジア）など国際学会・研究会へ参加助成を実施した。ことにアメリカ宗教学会参加においては被派遣者が科学関係の研究発表を積極的に聴取し、帰国後詳細な報告書を提出している（2007年度のアメリカ宗教学会参加報告は筆者の手になるものが、GPSSプロジェクトの公式ブログに5回に分けて連載された）。

さらに南山宗教文化研究所が企画した国際的プロジェクト『日本哲学の文献集成』に関連して、「科学・宗教・哲学」ワークショップが2007年3月、アメリカ・イリノイ州の神言会センターにて開催されたが、三田プロジェクトは趣旨に賛同し、資金援助を行った。この会合には南山宗教文化研究所からジェームズ・ハイジック第一種研究員が参加した。

また出版助成も行っている。すでに刊行が確定しているものとして、『物理学と心理学の対話——パウリ＝ユング往復書簡集 1932-1958』C・A・マイヤー編 湯浅泰雄監訳 越智秀一・黒木幹夫・定方昭夫・高橋豊・堀川恵・渡辺学 共訳（五十音順）がある。

このほかには、三田客員研究所員の日常研究作業に関して、ことに三田客員研究所員が南山宗教文化研究所滞在中、助手としての筆者が適宜アシスト業務を行っている。概ね三

田客員研究所員が科学者の立場から発想を提示展開し、筆者が宗教研究者の立場から応答補完する形態である。

GPSS プロジェクトとの協働

2004 年秋に 3 年間はじまった第一期 GPSS プロジェクトが幸いにも後援団体である John Templeton 財団によって高く評価され、事業の継続が決定された結果、2007 年度より第二期の同プロジェクトが、スワンソン所長を責任者、大谷栄一研究員を運営担当者として開始された。このプロジェクトより、従来以上の緊密な協働を要請された筆者は以後、新たに設けられた公式ブログ「南山宗教文化研究所『科学・こころ・宗教』プロジェクト」に関係情報を掲載する形式を主としながら、一層の協働を推進している。

この公式ブログ「南山宗教文化研究所『科学・こころ・宗教』プロジェクト」は、情報の発信と市民との交流を目的に 2007 年 1 月に設置された。URL、趣旨と目的は次のとおりである。

<http://GPSS-japan.cocolog-nifty.com/blog/>

プロジェクトの趣旨

現代日本社会において、科学は多大な影響と役割をはたしている。しかし、人間は理性と合理性のみによって生きているのではない。「科学中心」の現代社会において、人間の「ソフト」な面（こころ、感性、感情、精神、霊性、価値観、倫理）はどのように扱われるべきであろうか。

このようなソフトな面に関して、広い意味での宗教や倫理や道徳は伝統的に大きな役割を果たしてきたはずである。今日、このテーマについて何がいえるので

あろうか。

現代人にとって「科学」と「宗教」の世界観は矛盾して対立しているのか、あるいは相互に補うべきものなのか。

各分野で活躍している科学者、科学論・科学思想史の研究者とともに、この問題についてアプローチすることが、本プロジェクトの趣旨である。

プロジェクトの目的

- ① 科学と宗教の対話に携わる科学者と研究者たちのネットワークを確立すること。
- ② 科学と宗教の対話を促進すること。
- ③ 両者の対話の重要性を認識し、この問題についての日本での議論が世界での議論に貢献すること。

以下において、GPSS プロジェクトの基本テーマである「科学・こころ・宗教」のそれぞれの項目について、まず三田プロジェクトの視点から見た意義付けを簡単に試みたのち、書評記事を中心とする掲載記事から項目ごとに代表的なものを二編ずつ取り上げ、再録しておきたい。なお各編いずれも科学、こころ、宗教の三項目をあらかじめ念頭に置いたうえで執筆されているので、明確にいずれか一項目に特化しているとはいいがたく、重層交響的な内容を持っていることをご理解いただきたい。

「科学」—創造の神秘

三田客員研究所員の専攻は素粒子物理学である。宇宙の起源を考察の対象とするこの領域は、まさに存在の根源を探求するという意味で、宗教と大きく関心を共有する。三田客員研究所員が提起する根本的仮説は、「神はまず物理法則を創造された」というも

のである。これは必ずしも研究所内部を限ってもコンセンサスを得ているわけではなく、筆者自身も理神論との異同がよく理解できず態度を保留しているが、基本的に真理は単純なものであり、それは美しいという点に関し三田客員研究所員とのあいだで合意が形成されている。



ジョン・ポーキングホーン著『科学者は神を信じられるか——クォーク、カオスとキリスト教のはざままで』、講談社、2001年

著者のポーキングホーンは、相対論的量子力学の創始者であるディラックの弟子にあたり、ケンブリッジ大学で活躍した物理学者であり、引退後は神学を学び、イギリス国教会の司祭となった人物である。近年、日本においても自然科学の専門家が聖職者になるケースが散見されるが、ポーキングホーンはやはり別格の大物であるらしく、彼らの一人に「日本のポーキングホーンです」と語りかけたところ、大いに恐縮された経験がある。

科学と宗教を比較する際、科学が「いかに」を問い、宗教が「なぜ」を問う、とはよく耳にする区別であるが、実際著者もこの視点を踏襲している。そして著者によれば、その科学がまさに科学たるゆえんは、実験が可能であることにある。ゆえに実験できない分野は神学に近くなるとされている。その実例が宇宙論と進化論。たしかに実験室での再現は、想像を絶するだろう。しかし顧みれば、宇宙素粒子物理学などは、巨大な加速器を活用して、きわめて微小な部分現象に読み取れる太初の一つまり全体の

痕跡に注目しながら、宇宙を実験の対象にしているともいえるし、動植物の改良なども進化の流れに棹差す営みといえなくもない。この「部分」と「全体」の関係については、科学と宗教のみならず、哲学などを巻き込んだ、もっと緻密にして慎重な検討が必要だろう。

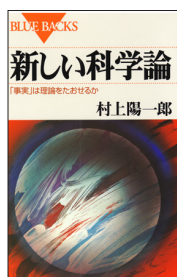
評者としては偶然と必然に関する著者の簡明な説明に、あらためて感銘を受けた。著者は「実り豊かな世界が出現するには、厳密でありすぎても、でたらめすぎてもだめで、偶然と必然の両方が必要なのである。偶然は新しいものを生む原動力であり、必然は新しく生まれたものの保存を確かなものにする」(67頁)として、ことに偶然に積極的な意味づけをしている。しかしこのような偶然への懐の深さを、評者自身も含めて、どれだけ現代人が自覚的に保持しているかと問えば、まるで自信がない。かつて伝統宗教はこうした偶然に起因する現象を受容し、人間の成長に結びつけるはたらきを、なんとか果たしていたようだが、いまや霊性としての実効性は衰弱著しい。また、新宗教以降の諸宗教やスピリチュアリティの運動、いわゆる新霊性文化(運動)を一瞥すれば、むしろ偶然を恐れて、万事を必然の原理で説明しようとする傾向が散見される。さらにはメディアを通じて、宗教研究者も伝統宗教に与する宗教関係者も、その流れに巻き込まれたかたちで規定される。必然に集中し、いつしれず自身の立場が必然なものにみえてくる。ここに膠着に至るような再帰性の「罨」に陥ってしまう。

対して、科学者が偶然といったきわめて基礎的な次元で真剣な議論を重ねる姿は、古代や中世に活躍した宗教者や神学者たちが真剣に神や人間を模索していた際の「リアリティ」と、学の倫理的責任を想起させ

うるのではないだろうか。天に唾する覚悟で語弊を恐れずいえば、キリスト教、そしてその流れを直接間接にかかわらずくむ宗教をめぐる諸学は、この偶然性を囲い込んでしまい、不感症に陥ってしまったようである。ものわがりのよすぎるわれわれは、著者がいう「完全な理論に到達したと思っても、なおその先に私たちを驚かすに足る新しい事実が発見される可能性」(23頁)をなまなましく、素朴にとらえるすべを失ってしまったらしい。それに比べて、決然として司祭になったポーキングホーンの見解に関しては、決定論的な発想に立つ自然科学者から根源的な批判を投げつけられるだろうが(実際、本書のことに後半部分では予定調和的な発想が濃厚に混じってくる)、そこに予想される議論の激しさや規模の大きさは、若々しく、力動的で巨大だ。偶然性をめぐるこうした思考は研究対象のみならず、研究活動そのものの回春をもたらす。つまり柔軟さへと導く再帰性の「薬」になりうるのだ。この薬を副作用覚悟で飲み込むに足る勇気と根柢の探求が望まれよう。

本書を一読し、評者自身も末席に連なってきた世界における宗教研究の豊かさに敬意を示しつつも、その輻輳する諸々の視点や方法論を整理、リストラし、ある種の「リハビリ」を目指すにあたって、一流の自然科学者による根源的な議論は有効な一青写真を提供できると感じたしだいである。科学と宗教のあいだをポーキングホーンのように、「わが身を持って」架橋する人物がこの国の学界や宗教界がどれだけ生まれるのか。実績が乏しいだけに楽観はできないが、諦めずに期待していきたいと思う。もちろんわが身に鞭打つ必要もあるだろう。

(2007年4月10日掲載)



村上陽一郎著『新しい科学論——「事実」は理論をたおせるか』講談社、1979年

まさに「古典」である。初版は1979年。現在評者の手元にあるのは今年2007年4月の第42刷である。ロングセラーが珍しくない講談社ブルーバックス・シリーズのなかでも最もよく売れているものの一冊であろう。

著者の村上氏は言うまでもなく日本における科学史研究の第一人者であるが、本書は科学史のこまかな知識を説いたものではなく、また読者にその方面の知識を前提として要求するものでもない。むしろ科学が成立する基本的な発想の基本形をやさしく説いたものである。恥ずかしながら科学関係の書籍を読む際には、それがたとえ中学生向けの入門書であれ浅学非才ゆえにつねに苦勞が伴い、さらに告白すれば、超文系であるためか、つねに違和感を抱いていたというのが実情である。しかし本書にかぎってはその手の障害がまったく感じられず、ある意味生まれて初めてスムーズに通読できた科学書となった。さすがにロングセラーなだけはあると感心した。

構成はいたってシンプル。

科学についての常識的な考え方

新しい科学観のあらまし

の二章建てである。第一章では、帰納と演繹の発想における違いがやさしく解説される。また、事実が理論を作り出す、すなわちデータが増えれば仮説が証明されて真理となり、その際、新しい法則は従来の法則を包括するのであり、後者は前者の一部

を構成するものとなるというしくみが明らかにされる。こうした構制のなかで科学者たちは、先見にまみれているとされる主観性を超えて客観性に到達しようと努力してきたのだと説かれる。第二章では、一転して、理論こそが事実を作り出すという発想が導かれる。この章が本書の中心である。ここでは、単純それゆえに客観的に思われる「見る」という行為も理解力を駆使して能動的に何かを作り出す作業であり、「事実」(fact)も「造る」や「為す」という意味を持つラテン語の「facere」に発するのであって、「裸の事実」などなく「造り出された事実」があるのみとされる。そしてその視点は、科学がおかれた社会の世界像や自然観と連関するものであり、そこでの主観側における意識構造の変化こそが、理論の革命を帰結し、新理論にふさわしい事実を生み出すのだとされる。

いわばトマス・クーンの「パラダイムの転換」を簡潔に解き明かすことが本書の目指すところであり、さらに賢明にも著者はそこに見られる主観の重要性から巻末において科学の倫理的責任を読み取ろうとしている。

ここでわれわれとして興味があるのは、この一種の共同主観である客観性が、いかにわれわれの《こころ》と関連してくるかであろう。本書のわかりやすさにもかかわらず、ここから先は評者の非才ゆえにまたもや混濁した状態に戻ってしまう。

たしかにニュートン力学からアインシュタイン革命への変革は辛うじて理解できる。しかし評者のような凡人がたとえば相対性理論のような新パラダイムが秘める《すごさ》を主観的に実感できるのは、原子爆弾が示した圧倒的な破壊力である。つまりその破壊力の創造においては従来の思考枠を

超えた新理論によるのだろうか、破壊のリアリティを感じるのは、古典力学的な爆風の風力や熱線の温度といった《人間的》な次元である。

結局こうした「革命」の根本的な意義は、どうやら古典的な地獄図絵の現実化という《闇》のイメージをとって人間に与えられてきたようである。もちろん新薬や新技術の開発に伴う難病の解決といった典型的な《光》も見出せようが、それは著者に言わせれば正しくない「進歩」であって、「革命」というほどのリアリティはないということになろう。ところが注意すべきことに近年、クローンや臓器移植の領域では「進歩」が「革命」に近づきつつある。しかもそこではまたしても地獄的なイメージが先行し、われわれの《こころ》を豊かに滋味深く育てるような気配は薄い。こうした恐怖感は技術の革新を科学理論の革新と混同したため杞憂に過ぎないのだろうか。いずれにせよ顧みれば、《こころ》は造られるものであるとともに造るものでもある。恐怖に密かに染められた《こころ》の理論がいかなる事実を生み出すのか。宗教との関係を考慮すれば、いかにも気になる問題である。

(2007年10月7日掲載)

「こころ」——科学と宗教をつなぐもの

科学と宗教を架橋する中間項あるいは第三項としての「こころ」は、従来、科学においては非実在的で非客観的なものとされ、精神医学や心理学といった「新しい領域」では研究されてきたものの、物質還元的な古典的科学領域ではさほど研究がなされてこなかった。また宗教においても「こころ」は救済および真理の根拠である神といった超越性の次元からみて、無明や自我中心といった表現で否定視される傾向が強かった。

三田プロジェクトでは当初「こころ」を研究対象として認識していなかったが、GPSSプロジェクトとの協働にあたり、その意義を確認し、ことに科学に近い視点としては脳科学、宗教に近いものとしては文学的な視点を踏まえ、今後一層の研究が必要であるとの理解に至った。



茂木健一郎「脳と進化 ネットワーク思考の可能性とその限界」、『理戦』80号、2005年夏

「時の人」茂木健一郎氏の科学エッセイである。『理戦』（実践社）という「左」派系雑誌に掲載されたもの。近年多くの新左翼系理論誌が環境志向など市民運動への傾斜を強めるなか（一例として旧ブント）、詳細は知らないが、この雑誌も同様の傾向を見せているようである（他号を見れば、宮台真司、小熊英二、野家啓一など非左翼系の新「知識人」諸氏から、松本健一、西部邁、佐伯啓思らいわば「右」系の諸氏まで見事に並んでいる）。それはそれでカルチュラルスタディーズ的な関心事ともなるが、ともかくインターネットの検索からたまたま見つけたのが今回取り上げる論文である。そして恥ずかしながら、かの茂木氏の論考をこのたび初めて読んだことを告白しておかなければならないだろう。

<http://www.jissensha.co.jp/pdf/8omogi.pdf>

この論文での茂木氏の主張は「無根拠性」の強靭さと科学革命上の契機としての重要性である。この無根拠性をもっともあらわにするものとして、熱力学の第二法則と説明原理としての進化論である「ネオ・ダー

ウィニズム体系」である。まずわたしの陳腐な頭脳が、専門が異なるというだけで簡単な事実すら忘却していることを痛感した。ネオ・ダーウィニズムはともかくとして、熱力学の第二法則が無根拠であるとはまったくふだん考えもしていなかった。しかしその無根拠性の「根拠」を読めば、それが特段目新しいものでもなんでもなく、ごくありふれた内容であるとも思われた。つまり、自分の特殊例を一般化するつもりは毛頭ないが、非科学者である庶民はごくありふれたものが無根拠であるという事実のうえに立っているということを忘れてらしい。いや、忘れているからこそ、安心してこの世をなんとかやり過ごしていけるのかもしれない。

ともあれ、茂木氏によれば無根拠であることは、その仮説の力を弱めず、むしろ強靭さを発揮する。たしかに無根拠の前に、根拠付けようとしたさまざまな反乱は大半が失敗に帰し、結果、無根拠がまるで焼け太りのようにますます強くなったように思われる。昨今の社会情勢を見ても、ニューエイジもオカルトも、さらにはスピリチュアリティさえもが早くも「賞味期限切れ」の様相を呈し始めている反面で、「ゆとり教育」の反省もあって、理数系の科目が強化されるという話を耳にしたりもする。もっとも政策担当者のだれもがその科学の無根拠性を認知しているわけではなかろうが、それにもかかわらずこのように科学をシンプルに賛美称揚する体制を絶え間なく立ち上げてくる凄みにこそ無根拠の強靭さが垣間見られるような気がする。

じつは無根拠の強さというのはキリスト教でもなじみのものである。まず神とは何かという神学上の大問題において最終根拠となるのは「わたしはある。わたしはある

というものである」(出エジプト 3:14) という「神の自己言及の禁止」という命令なのである。また神学論争を判ずるために開催されてきた(ことに古代の)公会議においては、基本的に非合理的なわけのわからない説がつねに正統説となってきた。そして事実、当時合理的だと思われた(そして異端視された)学説はやがて時間の経過のなかで劣化していった。結局、非合理的なものは非合理ゆえにこの劣化を免れているのである。

しかし茂木氏によれば、こうしたいわば鉄壁の顔なし無根拠に対して果敢に挑戦した反乱の徒のなかから、科学のパラダイムチェンジを果たす偉業をなすものが現れてくる。ニュートンしかり、アインシュタインしかり。彼らがなにをやったのか。もちろん具体的な内容に触れることはできないが、茂木氏が言うには彼らは「一見関係のないものに補助線を引く」ことによって「無根拠の別の姿」を明らかにしたのである。しかもその営み自体は、無根拠のなんらかを明にしたが、しかし新たな無根拠を生み出し、かつ、無根拠に挑戦することはいつまでも無根拠のままであるような。

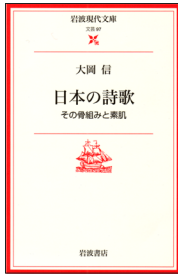
結局、茂木氏の結論は、ラッダイト(イギリスの産業革命初期に、職を奪うものとして産業機械を敵視し、機械破壊運動を行なった職人たち)にならずにひたすら考え続けることが重要であるということである。ならば、これは無根拠に無限に耐え続けることができるようになれということになる。しかしこの命題はそうならねばならないという当為的なものではなく、むしろそうになってしまうという事実確認的なものだと思う。つまり世の常識がいかなるもので

あれ、ドンキホーテはつぎつぎと現れてくるものなのである。

そしてもしドンキホーテが出てこないような状態になっているなら、それは事実上科学精神が根源から危篤状態に陥っていることであり、教育の改革程度で解決できる次元ではなさそうである。そうした社会では無根拠をまるごと忘却する脱力状態が常態化しているといつてよいのだろう。なるほど、筆者も平均的な日本人として、先に述べたようにこのあたりの事情をすっかり忘却していた。日本危うし、か。あるいはだからこそ無根拠に古くより親しい宗教の出番が近いのか(それにしては正直言って、神のかの禁止命令すらもいつのまにか手垢にまみれた単なる命題に変わっているようなのだが・・・)。

その難解さから敬して遠ざけてきた野家啓一氏の思想に学ぶ必要があるようだ。そういえば、氏の主著の一冊は『無根拠からの出発』だった。宗教哲学的アプローチからもあらためて取り組んでみる価値はありそうである。宗教側からの貢献といえ、先ほどの神の自己言及の禁止がその一例だが、その他には、ナーガールジュナの「空自らを空ずる空」というものもある。そしてキリスト教と仏教との交点で「ケノーシス(無化)の神」が熱心に探求されてきた。こうした発想が「科学・こころ・宗教」という枠組みにおいて秘める可能性も今後課題にしていくことができればと願う。ともあれ、そうした過程で無根拠を自覚し、無根拠に耐え、無根拠を今再び楽しめる境位に至りたいものである。

(2008年2月18日掲載)



大岡信著『日本の詩歌——その骨組みと素肌』、岩波書店、2005年

新たな年度を迎え、なにかと騒がしい世情にもかかわらず、どことなく晴れやかに心躍る気分である。顧みればこうしたとき、日本人はどのようにその気分を表現してきたのだろうか。言語表現においては主に、その喜びを詠う、つまり詩歌の形態を採用してきたものと思われる。実際、万葉の昔から現代にいたるまで、さまざまな詩歌が日本文化の中核を担ってきた。朝日新聞紙上でたしか三十年近くにわたり「折々のうた」という小さなコラムが掲載され続けたが、本書の著者である大岡氏はその担当者として、また自身詩人として、現代日本における詩的表現活動の最前線に立ち続ける文学者である。なお本書は、コレージュ・ド・フランスでの日本古典詩歌講義を基にしたもので、入門書的性格と高度に学術的な内容の二面性を具えた好著であり、日頃詩歌の世界には縁遠い現代日本人のわれわれにもすぐれた示唆を与えてくれるものである。

まず本書がわれわれの「科学・ころ・宗教」というテーマのうち、ことに「ころ」に深く関連することは、その扱う題材からして言うまでもないことである。ところが、日本詩歌史上ことさらその中核を占めてきた和歌の核心を「人間の心」に著者が見て取ることから、自然界とのかかわりがはっきりと描写される。「日本の和歌は、独創的な着想や天才的なひらめきに絶対的な優位性を認めるものではなく——もちろ

んそれらも大いに尊重されますが——さらに重視されたのは、一人の人の歌が他の人によって、さらには自然界の生物、また無生物によってさえ応答され、両者の間に唱和する関係が生まれることでした」と著者は指摘するのである。自然は応答する。しかし人間に対抗する主体的な存在ではなく、前回の記事で筆者が考察したような「背景」的なつつしみを備えているといえるだろう。自然は人間とともに前面に出たり背景に後退したりしつつ、調和を醸し出す機能を果たすともいえよう。

この動態性は日本の詩歌の基礎的な性格をなしている。「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」という芭蕉の名句をはじめとする多くの歌から、「日本の詩歌では、この『沁み入る』感覚は、きわめて愛された感覚」であり、「感性の真実」を示し、「『集中』と『放心』が決して矛盾せず、むしろ互いが互いの鏡となっている」ような、「理性的識別さえ超越した、内的空間」を形成していると著者は語る。しかもこのような動きの中で「感覚の意図的な混ぜ合わせが好まれました」と指摘される。当然それは「耽美主義的傾向」を帯びるものであるが、他方で、本プロジェクトにも参加いただいている田中裕氏(上智大)が自然神学を日本で語る際に「自然」を「実体的な存在概念ではなく……、名詞としてではなく副詞的・形容詞的に理解すべき」(『宗教研究』354号)だと語っていたことを想起させる。〈名詞-動詞〉の〈あいだ〉に漂うイメージを想像させることこそが日本人の感性に合致するといえようか。

となれば、この傾向に見合った自然科学さらに技術の新展開が日本人の同意を得やすいものであり、また事実上得意分野になると考えられる。たとえばロボット工学は

その典型例ではないだろうか。産業ロボットに徹するならば、つまり機能至上主義をとるならば、ロボットをなにも感覚的に擬人化する必要はない。しかしメディアを通じてわれわれが触れる、日本発の現代最先端のロボットは五感を備えた「人間に見える」ことが非常に重視されている。それは単に商業的なPR効果を狙った結果にすぎないとはいえないだろう。そしておそらく理想的なロボットとわれわれとのあいだのコミュニケーションは、鉄板に音波が反射するような剛的なものではなく、「沁み入る」ような過程をもつものとなるだろう。それは伝統的には「間」と呼ばれていたものである。

この場合、この感覚の「集中」と「放心」のうち、とくに後者が重要になる。そして放心が成就したときに、間を備えた複合感覚的な科学技術を成果をわれわれは安心して享受することができるようになるだろう。ここで一昨年開催された「科学・こころ・宗教」のシンポジウムを振り返れば、感情を情動的に処理できるかどうか議論されていた。またプロジェクト全体の目的を表現する概念として「美」がふさわしいのではないかと一部の参加者によって提案されてもいた。おそらくその方向性は、日本文化の土壌を前提に語る場合、とりわけふさわしいものであろう（もちろん、この「日本的」を排他的なものとして理解してはならない）。

そして宗教的な面に注目すれば、やはりキリスト教よりも仏教において研ぎ澄まされてきた思想であり、感性だと思われる。またそれは、哲学者や神学者よりも文学者において親しいものでもあろう。そうした世界からの示唆（さらには挑戦）を受けるためにも、本プロジェクトに一層多くの仏

教者や文学者を巻き込むことはさらなる討議のためにも、またプロジェクトそのもののいわば倫理的責任を果たすうえでも必然の課題であるだろう。

ロボット工学の第一人者としてメディアにしばしば登場していた森政弘氏（東京工業大名誉教授）をここで思い出す。氏は仏教にも造詣が深く、また画面上でいつもニコニコ顔だ。森氏と研究分野や宗教的関心を同じくする人たちなら、桜が咲き乱れるいまここで、どのようなロボットを作ろうと願うだろうか。桜の花が散りだすのも、明日か明後日か。もしロボットがその光景を十七文字で表現することができれば、「科学・こころ・宗教」の各現場でいったいどんな状況が生まれるだろうか。空想してみるだけでも、面白い。

（2008年4月3日掲載）

「宗教」—現代への応答

聖典、教義、聖職者、儀礼などが完備された伝統的宗教の弱体化が否めない昨今、われわれは科学の時代に生きていくという事実、こころを抜きにして宗教とかがわることができないという事実を突きつけられている。教会という厳然たる主体からこうした時代に対処しようとする試みと、仏教者でありながら科学的発想を積極的に同化



教皇庁国際神学委員会著
『人間の尊厳と科学技術』、
カトリック中央協議会、
2006年

しようという試みを以下で紹介してみたい。
評者にとってカトリック神学は比較的なじ

みの深いものであり、本書で扱われる諸問題も以前より直接的間接的に耳にすることが多いものである。しかし「科学と宗教」さらには「科学・こころ・宗教」という視点の外在性と多極性を特徴とする研究の場に身をおいてみると、いままで見えてこなかった、あるいは忘却していた一面が新たな課題として(再)提起されてくる。キリスト教の信仰を持つ一宗教研究者が抱いた素朴な見解を交えつつ、本書を読者諸賢に向けご紹介してみたい。

まず教皇庁国際神学委員会をご紹介すると、1969年に教皇パウロ6世によって始められた組織であり、カトリック教会においてはバチカン公会議以降の「新しい」現象の一つである。教理省直属の委員会であるため、教理的な問題を扱い、すでに『記憶と和解』といった近年国際情勢とも絡んで議論を読んだ文書も出している。ちなみに現教皇ベネディクト16世は最近までこの委員会の委員長を務めていたため、その動向は無視できない重要性をもっている。ただし、委員会が発する文書はあくまで諮問の見解であって、回勅や宣言といった教皇文書のような権威は持たない。

科学技術の急激な発展において、いわば人間存在が根底から操作の対象となりつつある現状を踏まえ、カトリック教会の立場を神学的に闡明する目的から、本書では伝統的な神学的人間像である「神の像」を改めて問い直し、さらに科学技術の時代において人間が神の意向に沿う仕事として「管理」(stewardship)を強調している(本文書の原題は、Communion and Stewardship、つまり『交わりと管理』である)。まず神の像とは人間の精神や肉体を別個に想定するの

ではなく、あくまで人間全体を指すものだと確認される。これはギリシア的な霊肉二元論ではない、ヘブライ人に特徴的な思想を引き受けたものであり、そこでは人間は霊や肉を「所有する」のではなく、霊「であり」、肉「である」という存在論的発想に立って人間を理解されるべきとされる。近代の科学技術とくに医療ではことにこの「肉」が行為の対象となるわけだが、そこでの行き過ぎを制御するためにも、この発想はつねに想起されるべきものとされる。

つづいて、これら存在性が三位一体の神秘を軸として交わりという点から考察されるが、その神学的理解においては形而上学的・精神的概念を物質的・生物学的な「データ」と混同することが戒められる。いうまでもなく三位一体とは「一にして三」という形式論理学でいえば矛盾になる思想である。顧みれば、工学の発想が宗教ことにキリスト教的な発想と一種の親和性を獲得し出したのは、科学技術において「ファジー」や「人間性」あるいは「自然性」といった「割り切れなさ」がさかんに主題とされたころだったように思う。はたして三位一体の哲学的解釈と工学的発想がどのように重層するのか。これはわれわれのプロジェクトにとっても面白い課題になるだろうとあらためて感じたしである。

さて本書では確認されていることとして、「神の像」は罪によって傷つきはするものの、消滅はしないという教会の考えがある。そこに神から人間に付与された自由意志という要素を考慮すれば、こころの情意性においては恩寵への反抗という通常表面化しがちな志向性ととともに、「回心」あるいは「修復」というモードが常に、かつ密かに働いていることが予想される。どうも「こころ」についてわれわれが語るとき、この修復モー

ドという型は忘れられてしまいがちではないだろうか。そこでは修復の目的になんらかの固定的な理想的状態をおいてしまうと、こころが束縛されてしまうのではないかという恐れをわれわれが無意識に感じてしまっているのではないだろうか。しかし、「神の像」という人間の本質には、そこでの神が三位一体の神であり、そうした固定性や硬直性とはことなったダイナミズムを秘めている面がある。回復を志向しつつも、その目標はつねに変化する。こういった発想をもっと深めていくにはどうすればよいのだろうか。

その他にも本文書にはわれわれの議論にとって刺激的な主張を見て取ることができる。たとえば、ビッグバン理論は「無からの創造」の教えに反しないが、同時に、前者は後者をただ間接的にうらづけるにすぎないと語られる。これはわがプロジェクトの有力な参加者である三田一郎客員研究所員の主張、つまりビッグバンは絶対に正しく、神はまず物理法則を造られたという主張に、是と非の双方から接近する。たしかにビッグバンは正しい。しかし絶対に正しいとはかぎらない。たしかに神は物理法則を造られた。しかし、その後なにもしなかったわけでもなく、今後新たな介入の余地を残している、といった考えも可能だろう。

いずれにせよ、本文書で展開されている「人間の尊厳」は、どこかしら不確定性を巧みに保持しており、また回帰性を特徴としているように感じられた。発出と還帰という馴染み深い概念が、科学的近代社会の情勢に沿うかたちで展開されているだけかもしれないが、本書はあらためて科学と宗教さらにはこころを考える際に有意義な発想を評者に思い出させてくれたらいいである。

(2008年1月16日掲載)



玄侑宗久著『アミターバ—無量光明』、新潮文庫、2007年、発表は2003年

ニューヨーク大学物理学教授のアラン・ソーカルがポストモダンの思想家から多数の引用とナンセンスな議論を用いて「境界を侵犯すること——量子力学の変換解釈学に向けて」というパロディ論文を発表し(1996年)、その後ベルギーの物理学者ジャン・ブリックモンとの共著で『「知」の疑問——ポストモダン思想における』を発表して以降、人文系知識人が科学の「先端知識」を導入してあらたな思想的実験を行なうことは困難となった。わけても他人目を気にすること甚だしい日本のアカデミズムでは、フランスやアメリカでのどさくさ劇からの余波を被る前に、密かに自主規制へと舵を切ったような観を呈し、いまでは自然科学の高等教育を受けたことがある「文転」経験者が細々と科学と思想をつなぐ営みに従事しているかのようである。

臨済宗に属する禅僧であり、芥川賞を受賞した小説家である玄侑宗久は、そういった一連の事情などまるでなかったかのように大胆に理論物理学の発想を取り入れ、きわめて独創的な作品を書きあげた。浄土教が育ててきた生から死への移り行き、いわゆる無限の光明に溢れる来迎の場面を、科学的知識との整合性を著者なりに確保しながら描いていく。そこでは相対性理論や量子力学の基本的な思想が言及されるなかで、ことに前者のエネルギー放出の考えが死者と生者との通交へと巧みに応用されている。さらにはトランスパーソナル心理学にも話

題は及んでいる。

浅学菲才の評者には、こうした著者の科学的思考が科学的に正しいかどうかを判断することができない。しかし単純に考えても、本書以外でも繰り返しこの話題を取り上げる玄侑は、自らの属する宗門（それは不立文字を謳う禅宗である臨済宗）はもとより、宗教界、思想界、科学界からうんざりするほどの批判と無視を受けていることは容易に推察できる。以前より知の越境には不寛容な風土でありつつ、さらにわれわれは「ソーカル事件」以後を生きているからである。玄侑自身もそうした逆風を感じていないわけではないだろう。では、なぜ彼は書き続けるのか。禅坊主にありがちな「はったり」か。最後は呵呵大笑で一件落着というわけだろうか。

しかし、そうではないだろう。著者はやはり現代日本人が受容可能な死への手引きを切に要望しているのであろう。本書の「解説」において中沢新一が、玄侑は誰でも苦勞しないで読むことのできる小説という形態を使って「日本人の死者の書」を書かねばならないと考えたのではないかと推測しているが、その通りだと思う。いままでの仏教は（そしておそらくキリスト教も）臨床的に役に立たないのだ。顧みれば、このような背景を持つであろう死者の書は思想の書であるとともに、ある意味でそれ以上に、たとえば源信の『往生要集』のように死ぬ技術・作法として実用書でなくてはならない。そして実用書であるためには、なにより読まれなくてははじまらないのである。

人は死に向かって「衰えて」いくとき、それは肉体的な衰弱にとどまらず、理性つまりロゴスの減退も体験する。かわって、イメージ（それは五感が交じり合った、あ

るいは未分の原感覚的なものかもしれない）がそれ以前とは比較にならない重要な役割を果たすだろうという理解を多くの人々が共有するようになったと思われる。しかし死への「準備段階」としてその書を読むという行為にあたっては、依然として理性的な識別作用が機能する。よってその死者の書は、理性から逸脱しない範囲で、イメージを豊かにする学びを実践し、しかも多くの人に活用される形態をとらなくてはならない。こうした条件を考慮すると、小説としては決して完成度が高いとはいえず、また擬似科学的な要素が否定できないにせよ、本書がもつ存在意義は理解できる。

いまこの社会には、こうした課題をめぐる声なきニーズと戸惑いが充満している（科学性を欠落させた江原啓之や美輪明宏などをめぐる諸現象を想起すればよいだろう）。かくも面白い、歓迎され、そして危険なテーマはめったにない。あくまで学問の立場を堅持しながらも、「科学・こころ・宗教」という微妙なトリアーデを扱う我々にとっても、気になる世界である。芸術はつねに思索の先を暗示する。また同時に、その実用感覚はこの学びが引き受けるべき倫理的責任を示唆するものだと思われる。

ちなみに評者が本書を初めて知ったのは、昨年アメリカ（カリフォルニアのバークレー）に滞在していたときである。日本人であり、キリスト者であり、アメリカで長年暮らし、いまはアメリカ人の夫とも死別し、その地で生涯を終えようとしていた、ある孤独な老日本語教師。彼女は独り言のように、しかしもしかすると反応が得られるかもしれないという期待をどこか抱いているかのように、評者を前に「『アマターバ』って本を読んだのよ」とつぶやいた。その場にいた日本人はだれもこの書を知らなかつ

た。帰国後科学を扱う仕事についてのこともあり、いまならもう少し踏み込んだ話ができるのにと悔やまれる。できれば、光につつまれる前にもう一度お会いして、「科学・ところ・宗教」をめぐって意見を交わしたいものである。

(2007年7月12日掲載)

おわりに

三田プロジェクトはすでに整理期間である最終年度に入っているが、第二期 GPSS プロジェクトは今年度も含めてあと二年続けられる。筆者としてはいまようやく科学、ところ、宗教の三項目について、関連文献の読解やマスメディアに登場した記事等を収集整理するなかで具体的なイメージを一応ながらも把握できたといえる。今後はこれらの諸像がどのように関連しあうかが焦

点となろう。また三田プロジェクトでは従来三田客員研究所員が物理学専攻である点から物質の起原に対して大きな関心を払ってきたが、評者がプロジェクトの一環としてアメリカ宗教学会に参加し、さまざまな研究発表を聴取分析した結果、現代における科学と宗教との対話は、むしろ生命科学を焦点に推進されているという印象が強い。この方面の強化が今後必要と思われる。

一層の研究深化を実現するためには、多くの知的情報が交流し、試行錯誤が繰り返され、その結果生じるであろう大胆な知の地平融合が欠かせない。幸い GPSS プロジェクトのブログは万人に開かれている。読者諸賢の積極的なご協力をこの場を借りてお願いする所である。

てらお・かずよし
本研究所非常勤研究員